

## 第7回学会発表のまとめ

### カントの平和論とウォルツァーの戦争論

小谷 英生(一橋大学大学院社会学研究科博士課程)

「カントの平和論とウォルツァーの戦争論」というテーマで発表させていただいた。原稿の改稿版は今年度秋に出る東京唯研の年誌に（査読がとおれば）掲載される予定である。当日こられなかった方はそちらを参照していただきたい。

さて、まず率直な感想を述べさせていただくと、全体として質問が少なかつたように感じた。それでも、大河内先生、森村先生をはじめとして、本質的なご質問をたまわることができたことを嬉しく思っている次第である。

質問があまり出なかった理由は、もちろん、いつもながら発表が難解だったことがもっともおおきな要因だと思うが、現代戦争論という「シビア」なテーマをあつかったことも大きかつたように思う。そしてウォルツァーにたいしてカントをもちだしてきたことの意味も。そこで、ウォルツァーに対するカント研究者からの批判というこの点についてすこしだけ補足し、感想に代えさせていただきたい。

筆者は「はじめに」でつぎのように書いた。

「強力殺傷兵器と核が拡散し、RMA（軍事における革命 revolution in military affairs）によって様変わりした現代および将来の戦争を、いや、むしろそこにあらわれる戦争観を批判的に検討しうるひとつの視座として、倫理学はいまだに重要な役割をはたしうるのではないか。カントとウォルツァーの比較、両者の時代的、思想的な背景の違いと議論のすれちがいを感じながらも、カント研究者の立場からの言いがかりにもひとしいウォルツァー批判をおこなおうという本稿は、ひとえにこの問いに導かれている。」

ウォルツァーの正戦論にたいして、カントの議論が有効なオルタナティブになろうとは、筆者はもとより考えていない。ただ、カントの議論によってオルタナティブがありうることを、それも「道徳的議論 moral argument」としてありうることを、示すことができる。これが本稿の趣旨であった。それだから結論部分で、発表者はつぎのように述べた。

「テロリズムやジェノサイドにどう対処すべきかは、政治の問題である。しかも正戦論によって片づくような政治の問題ではなく、過去と未来に開かれた〈現在〉における政治の問題である。したがって政治を、政治が生み出され、また生み返す現実の諸構造を変えることが、真の解決策となる。政治にかんする倫理学の役割は、いまのところこれら諸構造を変えることではなく、むしろこれらを変えるためだとうそぶく、あらゆる道徳的ごまかしを暴露することにある。」

現代では戦争と平和の問題が社会構造、それも文化的な構造というよりも市場の構造に由来していることは、あらためて強調する必要はないであろう。戦争にたいする哲学的な批判は、こうした社会構造

に目をむけないかぎり蚊の一撃にもみたないし、なにより社会構造を隠蔽するというかたちで逆機能する危険性をもっている。そして、残念なことに、現実から目をそむける後者のような言説が流布しやすいのも事実である。まさにウォルツァーの正戦論がそうであるように。

そこで、ウォルツァーの議論は政治的に「ただしい (=利用価値がある)」だけで、哲学的にただしいわけではないことを、本稿では論証したつもりである。その理由は、ウォルツァーの議論の是非を問う次元こそ、まさに倫理学の課題だからであり、そしてカントこそ、この次元を切り開いた人物だったのがある。

当日お越しくくださった方々、難解かつシビアな発表をご静聴くださったみなさまには、感謝の念でいっぱいである。また、その後の打ち上げでも、濃密な議論をもつことができた。重ねて感謝したい。どうもありがとうございました。